主な記事
2面　小教区紹介、ひと、典礼奉仕、浦上信徒巡礼、一粒会ミサ、司教館の窓から
3面　女性の会大会、高松塾総会
4面　ワールドユースデー参加募集　医療のともしび、書籍紹介、教区スケジュール

カトリック高松教区報

2011年1月1日（第140号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

主のご降誕と新春のお慶びを申し上げます

今年は教区大会の年にあたります。高松教区にとって最大の年となります。心してご一緒にこの大会に向けて歩み、その成果が大きくなるように、祈りを以て新年を始めることとしましょう。

目標に向かって歩もう

私にはこの数年間、一八八日本殉教者と高山右近列福の運動に携わり、分かったことがあります。それは、仕事をするということです。教会についても、同じことが言えるでしょう。

「どんな教会をつくりたいか」で昨年は問答を始めました。こんな教会ということを求める心があれば、必ずそのような教会になります。問題はこんな教会をつくりたいという夢を持つことです。

二〇一一年元旦

溝部　脩

心を一つに三地区で教区民のつどい

愛媛地区（10月24日）

子供たちも元気に意見発表した愛媛のつどい

『私たちはこんな教会を目指します』をテーマに愛媛地区の教区民のつどいが十月二十四日、松山市の愛光学園ドミニカンセンターを会場に開かれた。県内から司祭、シスター、一般信徒ら二百四十人が参加、教会づくりへの取り組み、あるべき姿について熱心に語り合った。

『キリストの平和』を全員で合唱し会は始まった。ファン・マヌエル地区長のあいさつの後、教会と修道会ごとに参加者が紹介された。

続いて同日のメイン行事がスタート。県内九教会の代表が司教書簡に答えて『私たちはこんな教会を目指します』をテーマに発表した。司教様から問いかけられた『信仰』『共同体』『社会への挑戦』について発表者たちは各教会の取り組みやこれから目指す方向などについて熱のこもった口調で語った。

「こんな教会を目指します」９教会が発表

『小さなことを言い訳にしない教会にしたい』『信仰を深めるために聖書の勉強や黙想会を続けている』『人が来てくれる教会を目指して諸行事をしている』『教会活動の中から修道会へ召し出しを受けた人が三人も出ている』『ミサ後にお茶を飲み、祝日には食事をしながら話し合う機会を大切にしている』などさまざまに話された。

そのあと子供たちが登場して意見発表、『教会へ来て友達に会えるのが楽しい』『みんなで遊んだり食べたりしたい』『友達に神様の命をくれてありがとうといたい』『神様に生まれないというのではなく、それをプラスに考えればより豊かな教会ができるのでは』『幼稚園との関係が多く話されたが、これからは教会と幼稚園の接点が一つのポイントになる時代に来ているのでは』『典礼、主日のミサが大事にされている』などと述べた後、

①今やっていることをさらに深めることを考えてほしい

②『実践する信仰』が大事であり、信仰を持って行ってほしい

③後ろ向きのグループは一つもなかった。これからの希望が持てたなどと締めくくった。

このあと子供たちによる『プレゼント』などの合唱。そのあと溝部司教司式により『一つの心で新しい教区づくりをするために始めます』との言葉でミサが始まった。

説教では信仰について『聞いて、腹の底まで落ちて香りが香ってくると悟ることができる』という仏教の言葉を紹介。神様とじっくり対話する時間を持つこと、よく聞くことが大切と述べた。また信仰の土台がなければ共同体、教会づくりはできない。信仰を持って生きる後ろ姿を見せることが宣教だとも語った。『上意下達では解決しません。自分たちで考えましょう。きょうが始まりです。今から歩んで行きましょう』との励ましの言葉で締めくくられた。

閉会式は愛媛地区会長の新居田大作氏があいさつ、『私をお使いください』の全員合唱でつどいは終わった。

香川地区（10月31日）

小さな一歩でも前に進みましょう

「『私たちはこんな教会をめざします』二〇一一年に開催される教区宣教大会のために準備してきたことを通して、私たちの現状が見えてきました。それを踏まえて、各小教区ではどんな教会をつくっていきたいのか、そのために何をするのかを発表し、分かち合いましょう」（教区民のつどい案内二〇一〇年十月三十一日パンフレットより）

おかげさまで当日は台風直撃を免れ、吹き降りの雨にもかかわらず八教会二百名が司教座聖堂に集まりました。午前中はそれぞれの教会が特色や現状、そして目ざす教会像を発表。信徒の高齢化と減少、受け身な体質など現状は深刻でしたが、その中にもそれぞれの教会の良さや可能性も語られ、笑いや驚きもまじって、あっという間に時間が過ぎました。

みなさん、いろんな気づきと発見があったのではないでしょうか。楽しい昼食と交流会の後、午後は司教様との対話。具体的なやりとりの後、「厳しい現状の中でも何とかしたいというそれぞれの教会の思いが伝わってきた、何よりみんなが前向きであることが良い」とご感想をいただき、続く石原孫右衛門殉教劇の子どもたちの迫真の演技、派遣ミサへと参加者みんなが一つになっていくのを実感しました。

さあ、「どんな教会をつくっていきたいのか、そのために何をするのか」教区民のつどいで発表したことを、私たちはこれから小教区で協力し合って実行していきます。たいへんな道のりですが、時に笑い、愚痴をこぼしながら小さな一歩でも前に進みましょう。そして教区宣教大会には香川地区のみんなが笑顔で元気に参加できますように。「神様と共に、みんなで助け合い支え合って歩む。それが神の民です。」この司教様のお言葉をいつも心に刻み、共に歩みましょう。

徳島地区（11月28日）

いつも笑顔で積み重ねていきたい

私達が、ＫＪ法による分かち合いの中で探し求めたものはみつかったのでしょうか……。

「ほっとする教会にする。」「聖書に親しむ。」「家庭での信仰を育む。」「聖書に親しむ。」にはどうしたらいいかが分かち合いのテーマでした。素晴らしい発表でした。でもね、一番ほっとして癒されたのは、手作りのアップルパイを食べた時と子ども達の歌を聴いた時でした。そう思ったのは私だけ？

アップルパイは、前々日突然、「焼いたげようか？」という申し出があり、「なら、手伝おうか。」という人がいて、二年間封印されていたパイが焼き上がりました。作る私達がわいわいがやがや楽しい時間を過ごしたのはいうまでもありませんが、当日パイをいただいたみなさんにも、ほっとする瞬間を味わっていただけたのではないかと思います。

中高生や子ども達の歌は、司教様が「歌が好き」だから歌をプレゼントしたいということで練習が始まりました。そこには、いつも笑顔があり、「ぼく、司教様の前でがんばって歌います。」と話す少年のまっすぐな姿がありました。心がキュンとして、もう愛せずにはおけないぞという感じでした。ミサの前にみなさんを感動させた歌声は、これらの結果なのです。

私個人が分かち合いの中で得たことは、それまで表面的にしか知らなかった人と話し、その人の人となりや神様への思いやバックグラウンドに触れられたことです。今まで関係なかった人が私の中で大切なひとりになりました。

司教様がお話の中で「一緒に祈る」「一緒に食べる」「一緒に働く」ことが大切だと語られました。その時、私達はこの日を迎えるまでに知らず知らずそのことを実践させられていたんだと気付きました。だから、取るに足らないささやかな実践でもみんなといつも笑顔で積み重ねていきたいと思います。

はばたき

◆二〇一一年　初春のお慶びを申し上げます。花眼という言葉は中国では老眼を意味しており、老いて物がぼんやりとかすんで見え、花を陶然と眺める時の人の眼にたとえる言葉だそうです。

近頃は白内障の手術が簡単で、術後、満足している人も、見え過ぎて困る人もいるようですが、コラム子などは自分の顔のシミや皺も見えにくいので当分は手術はすまいと思っています。

◆元来人間は自分のこともよく解らないし、人のことは全く解らないというのが真実だし、人の思いを本当に知るのは神のみであるというのが真実でしょう。

「人を裁くな」と言われたイエス様は、人間がいかにたやすく他の人を裁いてしまうかをよくご存じだったのです。裁くことは、その人にいつまでも消えないレッテルを貼ってしまう。裁判員制度が気になるこの頃です。

◆新年にあたり、今秋の「教区宣教大会」に向けて全教区民が溝部司教様と心を合わせて新たな出発をしたいものです。

イエス様の建てられた教会は人間の思惑や力によってではなく、霊の力によって動いているのだから、聖霊の働きを祈り求めながら歩んでいきましょう。

◆但し神に対しては花眼でなく心眼をもって臨みたいものです。

「はばたき」は今年一年徳島地区の高田芙美さんに執筆していただきます。

司教館の窓から
司教のひとりごと

ドラード

キリシタン時代、活版印刷機が日本に持ち込まれた。それを動かす技術を学ぶために、天正の少年使節と一緒にポルトガルに送られたのが、日本名は分からないが、ドラードと呼ばれる青年であった。彼は帰国後、実に多くの本を印刷出版した。ローマ字本は持ち込まれた機械で印刷できたが、日本語のものは、活字を作るところから始めないといけなかった。苦労が多かったことと思う。何よりもメディアを使っての宣教という心意気はすごい。ドラードは後に司祭となり、追放されたマカオで院長の役職に就き、最期にマカオでその生涯を終えた。なにげなく手にするキリシタン本を見るにつけ、先人の汗と涙が報われているのを感じる。

小教区紹介
伊予三島教会
小さな教会だが美しいミサ

製紙工場の高い煙突から白い蒸気が勢いよく噴出している四国中央市、伊予三島駅からそう遠くない所に白壁にえんじ色の屋根、白い十字架の教会はあった。戸を叩いて中に入ると、いつもあの笑顔のビデガイン神父様に迎え入れて頂いた。朝九時からの主日のミサは信徒が三人のこじんまりとした典礼だ。全信徒で十名という四国で最小の教会で、信徒組織は勿論のこと経済的にも全く成り立たない困難を極めた小教区だった。そういう中でのミサで、オルガニストの洗練された伴奏に透明な聖歌が響き、単純な典礼の心を感じさせられた。教会運営について尋ねたところ少人数で経済的にも負担がのしかかり、営繕面やお花などの奉仕も個人の善意によっている現状をつぶさに見た思いがし、特に経済面での協力宣教司牧態勢の確立は急を要すると感じた。ここでもやはり老齢化の波は避けようもなく五十代が最年少といい、子供はいない。

特に教区や他小教区の方々に訴えたい事は、との問いには、小さな小教区単独ではどうしようもない事がたくさんあり、そんな悩みに共感できる教区であって欲しいとのことであった。実際この目で見、耳で聞いて初めて現状を認識できるという意味で、私たちの教区にある教会を巡礼して回る事は信徒自身にとっての教会現状認識を深めるために大きな力になると感じさせられた。

文責　谷口広海

『典礼奉仕』のために ⑫
高松教区典礼委員　稲毛利之師

復活を体験する典礼⑤

新年あけましておめでとうございます。

「門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。」（ヨハネ十章三節）

キリスト教の救いは各人が〝人格〟となることです。復活とは、その人がその人そのものとなる、つまり〝人格〟となる、神による再創造を言います。

なかなか日本の風土ではそれがピンとこないでしょう。M・ルターの「我、一人、神の御前に立つ。」これは中世から跳び出した、〝近代人〟の意識ですが、この近代の意識あるいは精神が日本人には覚束ない。物質文明においては目を見張るものがあるが、精神においては〝近代〟というものを理解していない。この無理解が結果として、迅速な物質的近代化を成し遂げさせたのだから、結局のところ、〝近代〟などちっとも分かっていないことになります。

〝救い〟の理解もその影響を受けています。日本人にとって救いとは、一言で、「よい役割（機能）を果たせるように。」ということでしょう。しかしそれでは足りないのです。良い司祭として、良い信徒として、良い修道者として、良い信仰者として、良いサラリーマンとして、良い主婦として、良い技術者として、良い教師として…人生を全うする。それだけではいけない。あなたはあなた自身にならなくてはならない。役割はいくらでも交換可能です。しかし、あなたは世界にたった一人しかいない。

神はあなた一人があなた自身に成る為に、世界を造り替えることをも辞さないのです。これが分からないと〝人権〟なども分からないでしょう。死と復活という恵みは極めて〝人格的〟な経験です。

キリスト教信仰にとって神は役割（機能）に終わらない。神のペルソナ、イエスの人格、すなわち、「父と、子と、聖霊の御名」が決定的なのです。ご利益（役割）を期待するなら他の宗教でもよいでしょう。しかし、キリスト者はこの御名のために生きる。他の選択はあり得ない。例えば、あなたの奥さんは世界にたった一人ですが、「女」や「婦人」はいくらでもいる。だからあなたは「○○子！」と名前で呼ぶのです。これが〝人格的〟ということです。

人格は宇宙大のスケールを持っています。実は、人間ばかりでなく、動物、植物、草木も空も星も、全宇宙が、全被造物が、たった一つの名を目指し、たった一つの名を憧れ、待ち焦がれて、一つの名の中に導かれ登ってゆく。そこでそのもの自身に立ち返らされる、それが復活です。ここで谷川俊太郎の詩を紹介しましょう。

おまえが愛するとき
いまはいま終わり
いまがいま始まる
時は恐れと安らぎに充ちる

つつましいここにいて
おまえは無方へ旅する
幻のはての
なつかしい故郷に魅せられて

そこですべての名は溶けあい
ひとつの名になる
その名を呼ぶことでしか
おまえはおまえを見出せない

谷川俊太郎『愛』（抜粋）

最後に聖書を。

「勝利を得る者には隠されていたマンナを与えよう。また、白い小石を与えよう。その小石には、これを受ける者のほかにはだれにも分からぬ新しい名が記されている。」（黙示録二章十七節）

流謫碑訪れて
先人の信仰しのぶ
浦上の信徒ら松山巡礼

明治三年全国各地へ流された長崎・浦上の信徒の跡をしのぶ巡礼団が十月九日松山市の道後教会を訪れた。同日夕到着した浦上の信徒の一行四十六人を同教会で溝部脩司教も出迎え合流した。さっそく聖堂に入り同教会の合唱団「ユビラーテ」の歓迎を受けた。その後、同教会の丸尾宣司評議長から松山へ流された当時の浦上の信徒たちの状況について話を聞いた。汚い牢屋での過酷な扱いを受けたこと、役人の『説諭』に対し恐れることなく堂々と神を主張したことなどが話された。

翌日は松山市の衣山墓地にある『長崎キリシタン流謫碑』を訪れ、同地で亡くなった自分たちの先祖八人のキリシタンたちに慰霊の祈りを捧げた。碑は少年時代に同地に流されその後司祭になった山口宅助神父が昭和十二年に同地を訪れ建立したもの。碑には明治六年に自由の身になり同地を離れる時、亡くなった八人を残していくことへ『断ち難き別れを告げ』との切々たる思いもつづられている。

一行はその後、次の訪問先である高松に向かって出発した。

道後教会を訪れた長崎浦上の信徒たち

ちょっとひといき

新年に幸多かれと祈りつつ
除夜の鐘響くチャペルはミサの中
馬小屋に門松飾りジャパニーズ
初日待ち兎が月を残しけり

万葉

ひと
生命に仕える日々
高知　中島町教会　大岡滋子（しげこ）さん

大岡滋子さん（左）とお母様

大岡滋子さんは２０歳の時にご自分の父母、祖父母また祖先というつながりを創造主について考え始めた事から洗礼を受けられたそうです。そして、今から２１年前に、出生前の生命を守ることから生命全般を大切にしようとする日本プロ・ライフ・ムーブメントに出会われ、以来この運動に全力を尽くしておられます。

具体的な活動としては

○機関紙であるプロライフ・ニュースレターの発行（ニュースレターは、学校、教会、修道院病院等に送られています）
○パソコンの普及に伴って活動の中心となってきたホームページの更新
○講演等

を行われています。

大岡さんは「プロライフ活動も、毎日の母の世話も生命に仕える事だと思っています。生命はすべてに繋がっています。胎児の生命が大事にされる事は全ての生命が大事にされる事です。これからもずっと生命に仕えていきたいと思っています。」と話されました。

中島町教会　片山由紀子

”日本プロ・ライフ・ムーブメント”http://www.japan-lifeissues.net/

ザビエルの祝日に一粒会のミサ
桜町司教座聖堂

十二月三日のフランシスコ・ザビエルの祝日、高松教区で初めての『一粒会のために捧げるミサ』がカテドラル桜町教会で溝部司教様司式のもと捧げられました。ミサには司祭、神学生と共に、五十名ほどの信徒の方がお越しくださり、思いの大きさを実感いたしました。コーラス隊の素敵な歌声と普段とは違った典礼聖歌に、皆さんが心から若者たちのために祈ることができたのではないかと思います。

参列された方からは「今日は始まり、これからだよ」「若者たちがんばってね」などのお言葉もいただきました。若者の一人として、私は自分のできることで奉仕していくこと、そして自分の召命を福音を通して気付き、歩んで行くことができるようにしていきたいと、心も新たになりました。

どうぞこれからも若者たちのためにお祈りください。

桜町教会　川中翔太

天国からの贈り物
故松本淑子さんに感謝

故松本淑子さん

二〇一〇年一月六日、天に召された故マリア松本淑子先生は医師として大島青松園にてハンセン病治療に当たられていました。彼らの内にイエス様を見、イエス様の愛を実行した一生であったと思います。先生は欲もなく見栄も張らず、おごらず高ぶらない信仰の人でした。いつも困っている人に手を差し伸べるあしながおじさんでした。番町教会の釜が崎への支援は先生がもとで、それを引き継いだものです。

質素で独身を貫き、一日二食の食事しか摂らず、九十三歳で亡くなるまでそのスタイルは凛としていました。お年を召され、教会に最後に来られたのはクリスマスイブでしたが、まさかその十三日後に逝かれるとは思いもよりませんでした。

いつだったか誰かが〝先生はマザーテレサみたいですね〟と言われる程で、聖母のように心清らで番町教会の宝であり、母でもありました。

〝ミサに与っている時はいつも神様の事だけを考えているのよ〟と聞いて、雑念ばかりのわたしはとても恥ずかしく思ったものです。

また香川医大に献体され、その身をこれからの医学に役立つよう捧げられました。

その後十ヶ月がたち、その遺言により教区一粒会と番町教会にそれぞれ五百六十万円余りの献金がありました。神学生や医師を目指す若い人たちのお役に立ちたいと思う彼女の気持ちが心にしみて涙がこぼれます。亡くなられても自身を人と神様に捧げつくした一生は本当に素晴らしいと思います。

私たちにとってもこんなに素晴らしい人に出会わせて下さった事を神様に感謝したいと思います。松本先生本当にありがとうございました。

番町教会　中村弥生

若い力

キリスト教章取得研修会で学んだこと

K.S.（短大生19才）

今回の研修会は、イエス・キリストの一生について知るよい機会になったと思います。イエスが生まれたイスラエルでは、現在も昔も対立があり、そんな地域の中で救世主が生まれるうわさが広まっていて、イエスは父ヨゼフと母マリアの間に生まれました。このイエスが生まれたときには、ヨゼフとマリアは結婚していなかったので、彼らは命をかけてイエスを産んだということを知り、マリアはよく産むことを決意したと思いました。

キリスト教について松永神父から講義を受ける隊員（塩江黙想の家にて）

イエスはまた、幼少期には、両親の影響を大きく受けながら、大人の人と対等な立場で話をするなど、他の子どもではほとんど見られないような稀な才能を持っていたことがわかりました。大人になると大工をするために地方を転々としながら、人々からのけ者にされた人に対して積極的に関わりを持って愛をあたえていました。このような所から、キリストが将来的に20億人に信仰されるような人になった理由だと思いました。

わたしは、２日間を通して、イエスは３３才という短い生涯の中で、これだけのことを人々に教えていったのはすごいと思いました。

また、ミサは食事に深い関係があることを知って、食事を作る、囲む、食べるという３つの大切な要素は、今後の生活に繋げていくためにも必要だと思いました。これからスカウト活動をしていくために役に立つようなことがたくさんあったので、生かしていきたいと思いました。

キリスト教章研修会を受けて

A.T.（高校生16才）

僕は、今回の研修会に参加して、今まで知らなかったことをたくさん学ぶことができてよかったです。松永洋司神父様やブラザー八木の講話を聞いて、今までただ唱えていた主の祈りの意味を詳しく知ることができ、これから唱えるときには、意味も考えながら唱えるようにしたいと思いました。

僕が、この２日間のお話の中で一番印象に残っていることは、「放蕩息子」のたとえのお話です。このたとえは何度か松山教会でも聞いたことがあったけど、イラストで説明してくれたので、とてもわかりやすかったです。また、イエスの愛は恩送りの愛でお返しを求めない愛というのが、とても印象に残っています。僕もスカウト活動や学校生活の中で心がけていけたらいいなと思います。

他にも、食事の大切さのお話も印象に残っています。僕も最近は、インスタント食品が多くなってきているので、料理をできるだけしていきたいなと思います。また、家族と一緒に食事ができることに感謝したいです。

今回聞いたすべてのことをしっかり考えてスカウトのちかいとおきての実践にも活かしていくことができるようにしたいです。

（注）キリスト教章：ボーイスカウトに求められる３つの誓いの１つに、神（仏）と国に誠を尽くし掟を守るため、信仰心が求められます。その為にキリスト教を学んだ証しとして与えられるもの。

信者として環境考える

松山　126人集い女性の会大会

二〇一〇年三月、今年度第一回『女性の視点から教会を考える会委員会』が四国カトリック会館で開催され、次回「女性の会大会」について話し合いました。そして愛媛地区宣教司牧評議会に報告し、四月には道後、松山、郡中の松山地区三教会の担当者が集まり、具体的な案を作りました。その中で『感謝献金』を「一粒会献金」としたいとの提案を採択しました。六月の四県最終打ち合わせには司教様にも出席して頂き、プログラムの全容と次期大会地・松山の役割分担が決まりました。すぐに三教会担当者が集まり、担当教会としての役割を割り振りました。ポスターは青年が引き受けて下さり、大会には二十代から七十代までの多くの方が生き生きと参加して下さいました。四県より百二十六名もの方が参加して下った事に改めて感謝しています。

講師の瀬本正之神父様はユーモアを交えながら環境問題について、とても分かり易くお話して下さり、私たちはすっかりお話に引き込まれました。

一九九〇年一月一日のヨハネ・パウロ二世教皇と二〇一〇年一月一日のベネディクト十六世教皇のメッセージを祈りながら考えて欲しい事、またハイチのマザーテレサと呼ばれるクリストロア修道会シスター須藤のことも紹介され、神父様より参加教会へ「ハイチ復興への祈り」という本を一冊ずつプレゼントされました。そして昼食後、具体的なゴミの処理についても話し合いました。

私たちは日常的にゴミや生態系の問題をある程度は知って対応していますが、神父様はお話の中で、私たちはカトリック信者として、神様の前で環境問題について責任を問われている事。その事を心にとめて生きるために①神との和解②人間同士の和解③被造物との和解に心を留めて生きる事。生態系の輪を壊さないためには日常のごみは質、量ともにもとに戻るスピードを考える事。そして進化とは生態系を壊さない循環である事を心に留める事等を述べられ、最後に知恵の書（十一・二十二～十二・二）を心に留めて励むよう勧めを与えられました。私たちは日常の利便性を選ぶことで環境破壊に加担している事に心を留めたいと思いました。

愛媛地区担当　関ちず子

高松塾第一回総会

青年の養成めざしまず一歩

高松塾 全国から賛同者集い意見

高山　徹

この塾は、既にご紹介させて頂きました通り、溝部司教様の下で青年が広い意味での召命を見つめるために立ち上がってきています。この塾を本格始動させるため、賛同する司祭・修道者・青年総勢十五名が高松司教館で一同に会することになりました。去る十月二十二・二十三日のことです。高松教区内の方々をはじめ、広島教区・京都教区・大阪教区の方々、果ては遠く那覇教区からも押川司教様が駆け付けて下さり、思いを同じくする人々が会した良き集まりとなりました。

初日は、賛同者の皆様の到着時刻がまちまちであったので、とにかく食卓を囲んで語り合うひと時となりました。ただ、終わりの祈り・振り返りをする頃には、ざっくばらんな中にも一人一人がこの集いに心から思いを寄せる雰囲気が漂っておりました。

二日目は、メイン・プログラムとして、話し合いが行われました。塾の理念や形態等をテーマにし、方式としてはブレーン・ストーミング（とにかく頭にあるアイデアを出し合う）というものが取られました。非常に柔軟かつ積極的な意見が多数出され、それをパソコンで打ち込みスクリーンに投影しながら討議が進められました。今後、今回出されたものを叩き台に正式に始動する準備を進めることになります。本紙では都合により具体的な議事録をお載せできませんが、後ほどしかるべき手続きを経た上でお見せできるかと存じます。

当初から賛同者の方皆が了解しているのは、教区・修道会の壁を越え広く日本教会を視野に入れて青年を養成する塾を目指すということがあります。その思いは、実現に向けてまた一歩前進したかと存じます。出席下さった方は、「ここに確かに聖霊の風が吹いている」「現実は中々に厳しいが、石にかじりついてでも取り組む価値のあるものだ」等とおっしゃいました。

今回、ご都合により残念ながら出席頂けなかった賛同者の方々も多数いらっしゃいます。確実に輪が広がってきております。今後とも皆様のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

2010年度生涯養成の講座

1．カトリック四国会館において（下記一覧）

日時	講座名	講師	備考
月曜日 10:00～	「聖書を生きる（聖書 100 週間）」	西川助祭	講座３年目
火曜日 10:00～	「ヘブライ人への手紙」	浜口末男神父	１月から「ペトロの手紙」が始まる
木曜日 10:00～	「子育ての父母と共に」	Sr.ギリス	講座５年目
木曜日 15:00～	「聖書を祈る」	〃	講座５年目
土曜日 10:00～	「賛美の歌」	河合まゆみ	講座４年目

2．青少年委員会と協働

「若者と聖書」

教区内の７つの所で：カトリック四国会館、坂出教会、丸亀教会、徳島教会、松山道後教会、今治教会、高知中島町教会

3．黙想会

個人で聖書を祈る形の黙想会。同伴する指導者と祈りの分かち合いをして、聖書に親しみながら祈っていく。

年５回（4月、6月、9月、12月、2月）。次回は2月12日、13日に予定している。

場所：マリアの家

テゼの祈り

静けさの中でイエスの声を聴く

中島町教会典礼委員会　松本宏子

十月二十三日土曜日に高知市の中島町カトリック教会で、テゼの祈りを行いました。参加者は四十人程でしたが、〝たくさんのキャンドルの輝きと静けさの中で、祈りを仲間と共有する喜びを深く感じることが出来た〟という感想や、〝後になってもテゼの祈りで味わった恵みを感じる〟という、うれしい感想が聞かれました。〝ぜひ、続けて行きたい〟という声も多く聞かれました。

テゼの創立者ブラザーロジェの言葉（抜粋）、「心の最も深いところで、他の誰とも似ていないあなたのこの深いところで、キリストがあなたを待っておいでになるのです。」

マザーテレサの遺言（抜粋）、「本当に生きている人であるイエスとの、日々の親しい交わりをあきらめてはいけません。イエスが〝あなたを愛している〟というのを聞かずに、たとえ一日たりとも生き長らえることはできません。体が呼吸を必要とするくらいに、私たちの魂はその呼びかけを必要としているのです。もしそうでないなら、祈りは死んだものであり、黙想は単に考えているという事にすぎません。イエスは心の静けさの中で語りかけながら、あなたたちの一人ひとりが彼に耳を傾けるのを待っているのです。」

このお二人の言葉が私たちの心に響きます。

キャンドルの光の中で静かに愛する人の声を聴く…テゼの祈りはイエス様とのデートのようです。私たちはあきらめることに慣れてはいけません。真心をこめて、イエス様をお迎えする準備をしましょう。心の深いところでイエス様の愛のまなざしを受け止めるために…単純素朴なテゼの祈りの中で、仲間と声を合わせて繰り返し歌い祈る、そして静けさの中で、心の深いところに、イエスの愛の火がともされるのです。

私たちは、自分を創造しようとするこどもを
まなび、護りましょう
暁の星学園
鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園

モンテッソーリ教育のもとに
豊かな人間形成を支援します
長尾聖母幼稚園
23年度　園児募集中！
〒769-2302 さぬき市長尾西 689
TEL/FAX(0879)52-2294
http://user.shikoku.ne.jp/seibo-na

住環境福祉コーディネーターが家造り
福祉住環境リフォーム
高齢者・障害者に配慮したバリアフリーの住宅
福祉住環境リフォーム・新築・増改築工事・設計施工
有限会社リフォームオオタ
代表取締役　太田　修
〒763-0092　丸亀市川西町南449番地3　TEL (0877) 28-0881・FAX (0877) 28-0190
E-mail o-chandazo@theia.ccn.ne.jp　URL http://www.reform-oota.co.jp

医療のともしび（24）

書籍紹介　**ハイチ復興への祈り　80歳の国際支援**　須藤昭子著

ハイチのマザーテレサと呼ばれるシスター須藤への支援の呼びかけが、日本カトリック医師会のメーリングリストに載ったのは、今年２月でした。ハイチで大地震が起きた頃でした。そして、先般、松山での女性の会の講師瀬本神父様からこの本を送って頂いたのです。早速一気に読んでしまいました。

シスター須藤はクリストロア会所属の医師で関西の病院で戦後の結核の治療に携われた後、５０歳で今度は、ハイチの結核撲滅のため、神様との共同作戦に召されることになりました。その頃のハイチの患者さんたちは、昔の日本でのハンセン氏病のように、ただ隔離されるのみという悲惨な状態に置かれていたからです。

しかし日本で結核の治療をした時とは、全く違っていたのです。ハイチという国は、昔はカリブ海の真珠と呼ばれ、農作物の輸出でフランスに莫大な富をもたらす緑豊かな島でありました。しかしシスターが赴かれた時は、禿山だらけの西半球の最貧国で８０％が文盲、デュバリエ親子の独裁政権に苦しんでいる状態の時に、シスターの仕事が始まったのです。全くのゼロからの出発。結核を治すためには、先ず食料の調達から始めなければならなかったのです。この疲弊した土地を生き返らせて自分たちの食べ物をつくり、さらに生活の糧を得る方法を考えた末、始めたのは、炭焼きでした。それも、木のほか、やし殻やもみを焼くのです。自ら現場で学び、現地の人々を募って、タイや日本に研修に派遣し、副産物の木酢を利用した農業と植林に着手されたのは、シスターが７５歳の時だったそうです。後にハイチ人自身による市民グループが生まれ、活動の中核になり各地へその技術を指導に赴くまでに成長しました。自分たちの国づくりは、自分たちの手でやらねばという自立の心が育ち、今や後継者養成のための農業学校を設立準備中とのことです。

最近ハイチではコレラが流行しており、さらに菌は国連の活動家達が持ち込んだとの風評から住民が暴動を起こしたとの報道を耳にする時、またシスターが苦労されているだろうとの思いを馳せています。

皆さん一度読んでみてください。シスターのゆるぎない信仰に打たれます。そして、シスター須藤のために、お祈りとご支援をお願いいたします。

曽我部輝子

教区スケジュール

1月
- 1日（土）神の母聖マリアの祝日
- 2日（日）主の公現
- 9日（日）主の洗礼
- 10日（月）成人の日
- 11日（火）司祭評議会 10:00
- 16日（日）年間第2主日
- 18日（火）エキュメニカル祈祷一致週間（～25日）
- 23日（日）年間第3主日
- 28日（金）宣教司牧評議会役員会 13:00
- 30日（日）年間第4主日「児童福祉の日」

2月
- 1日（火）司祭評議会 10:00
- 5日（土）日本26聖殉教者
- 6日（日）年間第5主日　オペラ忘れられた少年（桜町教会）
- 11日（金）建国記念日　人権委員会in沖縄（～13日）
- 13日（日）年間第6主日
- 20日（日）年間第7主日
- 21日（月）広島・高松教区司祭合同黙想会in札幌（～26日）
- 27日（日）年間第8主日

小豆島教会の人たち新しい家族になったよ

地元で働く女性が手記

十一月三日、小豆島マリアの園での〝うどん交流会〟に中国から食品実習生として（株）サンコーフーズで働いている三人の中国人女性が参加していた。そのうちの一人に現況を綴って頂いた。

彼女らは地元で食品会社を経営している山本さん（小豆島教会信徒）の工場で働いている。その中の一人リュウさんの手記を紹介する。

わたしの目の中の小豆島

青い空　白い雲　山の木々赤い花　きれいな道　静かな町　美しい風景　これは私が初めて見た小豆島の印象です。これからの三年間、私は家族と離れて小豆島で生活します。ここに来る前は絶対寂しいと思っていましたが、私の想像とは全然違う生活が待っていました。会社に勤め始めたころは仕事も何も分からないし、日本語もあまり話せなかったのですが、そんな私たちに会社の人たちは親切に仕事や日本語を教えてくれています。

私たちは小豆島の会社に入ってお父さん、お母さん、お兄さん、お姉さんたちと新しい家族が出来ました。この前この家族と一緒に初めて日本の教会の信者さんに会い、中国でマリア様の話を聞いた事を思い出しました。でも実際には見た事がなく、この時初めてマリア様の像を見ました。

神父様は日本語が上手でない私たちに中国語でお祈りをしてくれて、私たちは本当に感動し心が温かくなりました。最後に皆一緒にマリア様の歌を歌いました。とても心に残り良い思い出になりました。会社の人、日本の家族、教会の信者さんは皆親切で面白く、楽しくて優しい人たちです。皆心が広い人たちです。

私は思います。三年後中国に帰ってもここでの生活は忘れられない思い出として、一生の宝物にしたいです。

（うどん交流会に参加していた稲毛神父は中国語で彼らの為に祈った）

左からリュウさん、カクさん、ヨウさん

ワールドユースデー　マドリード大会　参加者募集中

ワールドユースデー（ＷＹＤ）は、国連が1985年を「世界青年の年」と定めたことを受け、前年1984年「あがないの特別聖年」の閉会ミサで、教皇ヨハネ・パウロ二世が、青年たちにローマへと集うように呼びかけたことにはじまります。その後、毎年「受難の主日（枝の主日）」が「世界青年の日」と定められ、教皇庁信徒評議会が主催し、2～3年ごとに世界各地でWYDの世界大会が開催されることになりました。

「世界青年の日」が受難の主日に設定されているように、この大会は世界中の若者がひとつになり、教会の本質であるキリストの受難と復活の神秘を味わうことと深く結びついています。ひとつの信仰を持つ青年たちが世界中から集い、出会いを喜ぶ祭典としての要素だけではなく、回心に始まり、キリストの受難と復活の神秘を祝う巡礼の旅でもあるのです。

また教会と社会にとってＷＹＤは、若者に目を向け、将来を担う若者に信頼と希望を置くことの大切さを確認するきっかけになるのです。

1985年　ローマ　（イタリア）
1987年　ブエノスアイレス（アルゼンチン）
1989年　サンチャゴ・デ・コンポステッラ（スペイン）
1991年　チェンストホーヴァ（ポーランド）
1993年　デンバー　（アメリカ）
1995年　マニラ　（フィリピン）
1997年　パリ　（フランス）
2000年　ローマ　（イタリア）
2002年　トロント　（カナダ）
2005年　ケルン　（ドイツ）
2008年　シドニー　（オーストラリア）
2011年　マドリード　（スペイン）

2011年ワールドユースデー マドリード大会は、8月16日～21日に開催されます。そのための日本巡礼団はAコースとBコースを準備しています。

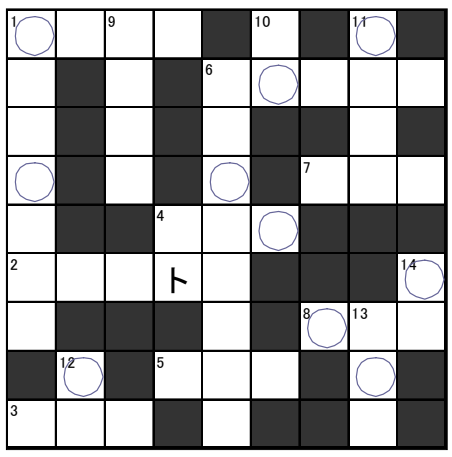
Aコース【2011年8月7日（日）～ 8月23日（火）】…サンチャゴ・デ・コンポステッラ巡礼＋ワールドユースデー本大会　定員200名　費用8万円(航空券別)

Bコース【2011年8月15日（月）～ 8月24日（水）】…ワールドユースデー本大会　定員100名　費用24万円（航空券込）

参加資格(年齢)は、18歳(高校生をのぞく)～35歳です。詳細はBr.八木にお尋ねください。

クロスワードパズル

タテ、ヨコのカギにあてはまる言葉を考えましょう。○枠の文字を並べるとある言葉になります。（答えは次号）



【ヨコのカギ】
1　パウロの出生地。○○○○
2　○○○トの信徒への手紙Ⅰ－１３章
　わたしはあなたがたに最高の道を教えます。・・・信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である。
3　ホレブ山とも呼ばれる。「十戒」授与の場
4　イサクとリベカの間に産まれた双子の兄弟で、兄は○○○弟はヤコブ。ヤコブの策略により長子権を失う。
5　モーセの兄
6　イスラエル王国は○○○○○に滅ぼされる（ＢＣ７２１年に首都サマリアを陥落。「サマリア人」とは、陥落後もサマリアに留まったイスラエル人と移民との雑婚により生まれた人々とされている。）
7　ガリラヤの漁師シモンは○○○と呼ばれ、イエスより天国の鍵を預かる（マタイ１６．１９）バチカンにあるカトリックの総本山サンピエトロ大聖堂はこの人の墓の上に建っている。
8　「ダビデの子に○○○。主の名によって来られる方に祝福があるように。いと高きところに○○○」（マタイ２１．９）

【タテのカギ】
1　徳川家康の命で追放された○○○○○○○は１６１４年１１月８日マニラに向けて出帆。溝部司教様はこの人の列福祈願公式巡礼団の団長です。
6　ペルシャ帝国はＢＣ３３１年にマケドニアの○○○○○○○○大王にほろぼされる。大帝国を築いた大王は、各地にギリシャ風の都市を建設し、ギリシャの習慣や思想、言語を普及させた（ヘレニズム文化の伝播）。
9　ダビデの子○○○○の審判
　そして王は「剣を持って来るように」と命じた。王の前に剣が持ってこられると王は命じた。「生きている子を二つに裂き、一人に半分をもう一人に他の半分を与えよ」（列王記上３．２４）。片方の女性は泣き崩れ、もう一人の女性に赤ん坊を渡すよう願った。本物の母親はどちらでしょう？
10　モアブの女○○がナオミに「畑に行ってみます。だれか厚意を示してくださる方の後ろで落ち穂を拾わせてもらいます」と言う。故郷に帰ってきたものの二人には生活の手段がなかったので落ち穂拾いをすることにした。ミレーの名画「落ち穂拾い」は、この様子を描いたものとされている。この○○の家系はダビデ王やイエスにつながる。
11　ギリシャ語で「油を注がれた者」の意
12　神の命令を無視し、船で逃走したが嵐になり魚に飲み込まれる。魚の腹の中で反省した○○は３日後に吐き出されると、神の命令を実行した。
13　イスラエルの初代の王になった○○○は勇敢な戦士であったが、傲慢になり神に背き、うつ状態に陥る。これを慰めたのは少年ダビデの竪琴の音だった。
14　○○：ガリラヤの村。ここの結婚式でイエスは水をぶどう酒にかえた。

書籍紹介

■こどもが祈り始める時

現代の日本ほど、子供の心の教育の必要性が叫ばれている時代はないであろう。最新の研究では人格形成や価値観づくりにおいて幼児時代がいかに重要であるかということを繰り返し指摘している。

教育家モンテッソーリ女史は数十年前にすでに幼児期の精神発達と人格形成の関係を観察し、これをしっかりと認識していた。

本書はそのモンテッソーリ女史が研究し、自らも実践した幼児の宗教教育についての理論と実践法である。本書は子供の自然な発達にそって、子供の心にある［宗教心」、神へのあこがれをはぐくむことに大きな特色がある。

定価1、575円（本体1、500円＋税）四六判 221頁
ドン・ボスコ社

編集後記

やはり季節は確実に巡る。

教区報十一月号の発行が遅れ、今度は新年号が一月一日発行となりあわただしい編集日程となった。それはそれとしても時は容赦なく光陰矢のごとく過ぎ去るものだ。

また新春を迎えたが今年も矢のごとく過ぎ行くのか。時を惜しむ事も忘れまい。

医療法人社団聖心会　阪本病院
看護師・准看護師
随時募集中です！
院内保育園開設

ご連絡を
お待ちしています。
連絡先（事務局）
0120-770-315

聖ドミニコ宣教修道女会